



「透析を止めた日」

堀川恵子 (著)

講談社

1,980円 (税込)

先輩経理ウーマンが
褒める
お気に入りの

この1冊

オススメ
Book

皆さんは透析と聞くとどんな治療を連想しますか？ 身近に透析をしている人がいなければ、腎臓の機能が低下した人が病院で血液のろ過をしてもらった程度イメージかも知れませんが、しかし、本書を読むと、そんな生易しいものではないことが分かります。フリーのディレクターだった著者は、仕事を通じてNHKのプロデューサーだった男性と知り合い結婚します。結婚前のある日、男性は仕事のかたわら長年透析治療をしていることを彼女に伝え、シャツの袖をたくり上げて自分の左腕を見せます。そのときの驚きを彼女はこう書いています。「逞しい腕の肘から手首の内側にかけて、腕の血管に沿うように直径2〜3センチのコブがボコボコと山脈のように連なっている。初めて目にする異様なさまに、私は胸を突かれた。そのコブはシャント（透析のために作ら

れた血管）の上にできる瘤でした。再生しない腎臓を抱え、透析は一生続きます。もし透析を止めれば数日から数週間で死に至ります。透析患者はそんな恐怖を一生抱き続けなければならないのです。

そしてもっと驚くのは、透析をめぐる医療システムの問題です。「透析患者が10人いればビルが建つ」と言われ、年間の医療費が1兆6000億円という巨大な医療ビジネス市場なのに、体調が悪化して透析ができなくなった患者は「溺れるような苦しみ」のなかで壮絶な死を迎えるしかないという現実。その死の光景は人間の尊厳とはほど遠いと著者は言います。「私たちは必死に生きた。しかし、どう死ねばよいのか、それが分からなかった」。本書の帯に書かれた言葉は、透析患者である夫を最期まで看取った著者の「こころの叫び」のように感じました。

(還暦ばあば)